

《研究ノート》

明星大学本『文正草子』絵巻と挿絵図様の酷似する『文正草子』絵巻について

—チェスター・ビーティー本と東海大学本—

山 本 陽 子

室町時代に成立した『文正草子』(塩屋文正・ふんしやう)は、お伽草子の中でもめでたい話として、江戸時代に流行した。吉例として正月の女子の読初の読み物にされた¹⁾というだけあって、多くの絵入り冊子や絵巻が作られている。その本文は、渋川版『御伽草子』と比較した岡田啓助が、重要な異本として挙げ、比較翻刻するもののみでも5種に上る²⁾。さらにその挿絵については、版本や素朴で安価な奈良絵本から、金銀彩をふんだんに使った豪華作品まで、挿絵数から構図から作風も極めて多様な作品が知られている。

それらの中において、明星大学所蔵の『文正草子』絵巻と酷似する図様を持つ『文正草子』絵巻が、複数存在していることが判明した。それらの図様がどこまで似ているか、なぜ、どのようにして作成されたのかを、その近似点と相違点を検討することによって考察したい。

1. 明星大学図書館所蔵『文正草子』絵巻について

明星大学図書館が所蔵する『文正草子』絵巻は現在、詞書を含む全ての写真がWEB上で公開されている。公開に伴って平成22年に調査が行われ、報告書³⁾が出された。柴田雅生による書誌⁴⁾は下記の如くである。紙本著色3軸、幅はいずれも33.1cm、長さは上巻1334.9cm・中巻1365.8cm・下巻1329.6cm。表紙は練地草花模様緞子装、題箋は上巻「ふんしやう上」・中巻「ふんしやう中」・下巻「ふんしやう下」、付属の黒塗箱には「文正物語」と記す。江戸時代前期の制作と思われ、本文は岡田啓助が原本の姿を多く伝えているとする寛文4年長尾平兵衛刊『ふんしやうのさうし』の本文に近いという。挿絵は上巻6図・中巻7図・下巻6図の計19図である。

詞書下絵と挿絵については、山本の報告⁵⁾を抄録する。見返しは布目の金箔地に、花唐草模様がうっすらと浮かび上がる。詞書の料紙には金泥で、霞や水流・土坡・草花・小松などの下絵が草筆で描かれ、各巻始めの料紙の下絵は、密度が高く細かく描き込まれる。

挿絵は保存が良く色彩も鮮やかで、極めて丁寧に細やかに描き込まれている。絵の上下に金泥で直線的な霞が区画され、中に大小の金砂子が厚目に蒔かれる。地面や土坡、障子の霞の絵には金泥がうっすらと刷かれる。建築は界線がきっちりと描かれた数寄屋風寝殿造⁶⁾で青畳が敷き詰められ、襖障子や杉戸にはあっさりした探幽風の水墨画や彩色の花鳥画、有職文様などが描かれる。

建築に比べて、風景の土坡や水波は簡素であるが、柴垣や柳や松・牡丹・鴛鴦や鶏の親子、画中

画の屏風などの点景は細かく丁寧を描かれる。また、塩を運ぶ牛馬や、唐風の服装の見通しの尉も巧みである。ただし潮汐や製塩、塩の運搬など労働場面の人物までも小奇麗で上品すぎ、人形のようなのである。

顔立ちは、塩焼きから身を立てた苦労人の文正も大宮司も新居の中将も娘達も、等しく白塗りで代緒の隈は極めて淡く、一部の庶民や従者の顔色で代緒がやや強い。特に文正など主だった男性は目、鼻、口が細密に表され、文正の妻や娘達の顔もゆっくりした丁寧な線で、細かく描き込まれる。口はいずれも深紅に塗られ、開く場合は口角が上がる。顔立ちに年齢差や個性はほぼなく、困惑や驚愕のような感情に乏しい。

着衣は、大宮司の家族や主人公の文正一家から見物人まで、各々の着物が鮮やかな色遣いで、様々な紋様が極めて細かく描き分けられる。また屋敷の几帳や黒漆塗りの調度品も、繊細な模様で彩られている。文正は最初の場面のみ四目紋のついた水色の小袖に縞の袴、以後ほとんどは水色の小紋の小袖に薄いあずき色に臙脂の模様の袴と江戸時代風だが、最後の都での二場面のみ黒の東帯である。文正の妻は終始変わらず薄黄に赤と青の花模様、姉嬢は桃色に紅の模様を描いた袷という王朝の貴女風の装いである。二位の中将は、青の三重襷文の直衣という王朝の貴公子の姿から、商人に身を窶した場面では黒の紋付羽織に裁着袴に笠という、当世風の洒落た姿に一変する。

各場面の物語と各挿絵の概要は以下の如くである。(図1 明星本各挿絵一覧)

上巻第一図 (横長大画面) 鹿島明神の大宮司から、文太は暇を出される。絵は左の吹抜屋台の屋内に大宮司の娘たちと一族、右に屋敷の庭先でかきこまる文太。

上巻第二図 文太は塩屋で働き長者となり名を文正と改める。絵は右の海辺に潮汐・塩焼き・薪運びと塩運びの様子、左の門内の屋敷に文正と妻。

上巻第三図 文正は大宮司に子供のないことを咎められ妻に暇を出そうとする。絵は左の館の奥に文正と顔を背ける妻。塀の外右側に蔵と塩俵を馬に積む人々。

上巻第四図 文正夫婦は鹿島明神に参り吉夢を見る。絵は左の鹿島の社殿から出て夫婦に蓮華を授ける神使。縁先に参詣の女性たち。右の庭に馬と輿と従者たち。

上巻第五図 文正の妻は二人の娘を生む。絵は吹抜屋台に描かれ、左奥に産室、左手前に侍女に抱かれる赤子と、右側奥の文正の右側で乳母に抱かれる赤子。

上巻第六図 文正の娘たちは美しく成長したが求婚に応じない。絵は吹抜屋台の座敷の左奥に妻と二人の娘、中央奥に文正。右下に中庭。

中巻第一図 常陸の国司が大宮司に文正の娘を求める。絵は吹抜屋台の左奥に直衣姿の男、中に狩衣姿の男たちと酌をする童子、縁側に文正、右上塀外に馬と従者。

中巻第二図⁷⁾ 都で国司は文正の娘たちの話を二位の中将にする。絵は左奥に夜着を着る中将、直衣や狩衣の男たちと童子。右の庭に遣り水。

中巻第三図 中将は文正の娘達を恋い煩う。絵は吹抜屋台の右奥に青の直衣の中将。囲むように東帯と衣冠姿の男達と酌をする童子。縁に狩衣の男、左に庭。

中巻第四図 中将達は文正の娘達に会いに行く決心をする。絵は右奥に両親、対する中将は内心で別れを告げる。左下の縁側に狩衣の一行。

中巻第五図 中将一行は商人姿となって常陸へと下り、見通しの尉に予言される。絵は山中で、左に唐装の見通しの尉、右に商人姿の一行。



図1 明星大学本『文正草子』絵巻挿絵一覧
(コントラストとシャープネスを強調した)

- 中巻第六図 中将一行は文正の屋敷を訪れ、都の商人と名乗る。絵は左奥の屋敷から視く文正、中庭に狩衣の男たち、右の門内の侍女と対する商人姿の中将一行。
- 中巻第七図 文正は何も知らずに中将一行を屋敷に泊める。絵は左の座敷中央に商人姿の中将、左に一行、酒肴を挟んで右に文正。右の台所に調理人たち、庭に鶏。
- 下巻第一図 (横長大画面) 管弦の会で御簾が吹き上がり中将と姉娘が見合う。左奥に妻と琴を弾く姉妹、御簾の右に直衣姿の中将と一行、手前に文正、庭に聴衆。
- 下巻第二図 中将は同夜、姉娘の部屋に忍び入り契りを結ぶ。絵は左に吹抜屋台の二部屋。奥の部屋に口説く中将と姉娘、手前の部屋に妹娘たち。右は遣り水の庭。
- 下巻第三図 訪れた大宮司が姉娘の婿を中将と見抜き、文正は驚愕する。絵は左奥座敷に直衣姿の中将と狩衣姿の一行、庭に平伏する大宮司、驚愕し走り回る文正。
- 下巻第四図 中将は姉娘を具して都に戻る。絵は山中で中奥に水面。右下に牛車と輿と従者たち。

左中央の樹下に行列を見物する5人。

下巻第五図 中將の嫁の噂を聞いた帝が妹娘を召して后とする。絵は清涼殿。御簾の前に酌を持ってかきこまる束帯姿の男。左右に束帯3人、庭に狩衣姿の男達。

下巻第六図 妹娘の皇子は七歳で皇位につき、文正一家は榮えた。絵は左に姉娘と中將、2人の子、束帯姿の文正と妻(?)と右に侍女たち。

卷子の紫の平打の巻緒は切れかかっているものの、本文も挿絵も概して保存状態は良好で、剥落や退色は見当たらない。先の柴田によれば、「文正草子」屏風として下巻第一図と同図様の二曲屏風が、茨城県立歴史館に所蔵されているという⁸⁾。

2. チェスター・ビーター・ライブラリ所蔵絵巻〈CBLJ1186〉

アイルランドのチェスター・ビーター・ライブラリに、明星大学本と図様の酷似した二件の「文正草子」絵巻が存在することを、2011年、石川透の講演により教えられた⁹⁾。同絵巻はすでに作品23・24として「チェスター・ビーター・ライブラリ絵巻絵本解題目録 図録篇・解題篇」¹⁰⁾に、一部の写真図版とともに紹介されている。まず作品23の二巻本、〈CBLJ1186〉について、三戸信恵による書誌と所見の概略を引きたい。卷子2軸。上巻は欠、中巻32.6×1397.6cm、下巻32.6×1412.4cm。中巻外題「ふむしやう物かたり」、下巻は外題なし。表紙は紺地金欄に唐草星文様、見返しは布目金箔。料紙は鳥の子紙に金泥の草花模様散らし、本文は漢字平仮名交じり、中巻詞書第二紙と第三紙が天地逆に貼り込まれるが、詞書自体に欠損部はない。詞書は和歌12首を備えた寛永版系とされる。

絵は中巻7図、下巻6図、下巻第1図は2倍の長さの大画面で、17世紀後半の制作、「良質の絵具を用い、濃彩で丁寧に仕上げられ」、「やまと絵と狩野派の画風の双方を学んだ専門絵師」によるとされる。三戸は中巻第1図が挿入位置からすれば、大宮司が文正に常陸国司と娘との縁談をもちかける場面のはずが、文正の上座の人物が、この後で登場する中將とその一行と同じ服装に描かれていることに注目し、主題に疑問を呈している。

明星本との比較¹¹⁾では、明星本中巻冒頭の「それより大くうしとのを」は〈CBLJ1186〉中巻と、下巻の「その、ち心もことはもをよはぬてはこに」も〈CBLJ1186〉下巻と一致し、挿絵数は両者とも中巻7図、下巻6図、下巻第1図が長いことも明星本の中・下巻と一致する。寸法は明星本が縦は0.5cm大きく、横は〈CBLJ1186〉が各数十センチ長い。これは字配りや表具時の差に因るものと思われ、挿絵の大きさはほぼ等しい。詞書の料紙は〈CBLJ1186〉を写真で見る限り、紙質も料紙下絵も近似する。筆跡は比較的似ているが、「の」の字などに違いが見え、同筆か否かは判らない。変体仮名は「を」の「遠」が「越」などと差異があり、1行の字数も明星本が巻頭の詞書で中巻は16字、下巻は18字、〈CBLJ1186〉は双方とも17字と異なる¹²⁾。

個々の挿絵の図様は、〈CBLJ1186〉の13図はいずれも明星本中・下巻の各図と対応する。いずれも構図と図様はかなり細部まで明星本と一致するが、障子の文様や着衣の彩色と文様はそれぞれで異なる。顔の描き方も似ているものの絵師は異なり、〈CBLJ1186〉の方が明星本より顔立ちは柔らかく、頬の線や皺や二重瞼の線、代赭の絵具の濃淡を巧みに使って、老若、貴賤を描き分けてい

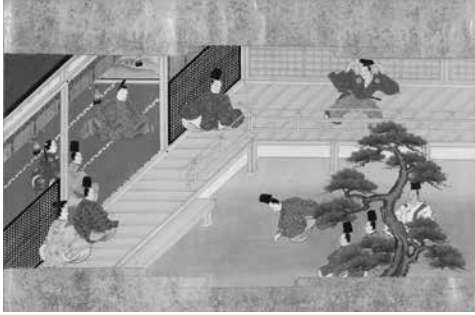


図2 〈CBLJ1186〉本 下巻第3図
右下の従者が3人・文正は中年相

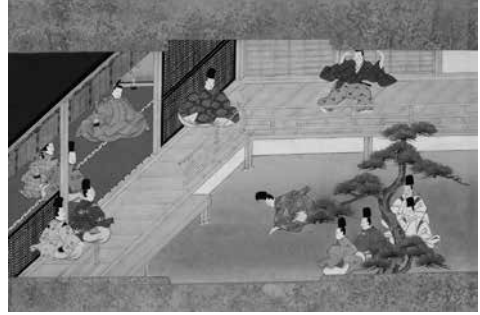


図3 明星大学本 下巻第3図
右下の従者が4人・文正は若年相

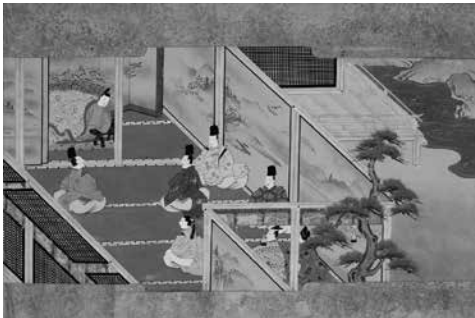


図4 明星大学本 中巻第2図
夜着を着て横たわる中将



図5 明星大学本 中巻第3図
直衣姿で座る中将

る。明星本と人数や什器に異同があり(図2)(図3)、襖や板戸の画題は異なる。庭木の種類や位置はほぼ等しいが、時に遣り水や湖水の有無に相違がある。明星本に見られた鴛鴦や鶏はない。

挿絵の配置では、三戸が疑問を呈した〈CBLJ1186〉中巻第一図は、明星本も同じ個所に貼り込まれ、少なくとも〈CBLJ1186〉に限っての錯簡とは思えない。

注目すべきは〈CBLJ1186〉では中巻第二図と第三図が、明星本と逆の順に貼られていることである。明星本の中巻第二図(図4)は夜着を着て脇息に体を預けた中将が、直衣や狩衣の男たちに対面し、第三図は三重襷紋直衣の中将の前に束帯と衣冠姿の男達が描かれている(図5)。詞書では都に戻った国司が中将に気位の高い文正の娘たちのことを話す場面と、恋煩いに陥った中将を人々が慰める場面であり、中将が夜着を着て横たわる明星本中巻第二図の方が、後者の図柄にふさわしい。すなわちこの箇所については〈CBLJ1186〉の挿絵の順序が正しく、明星本の挿絵は第二図と第三図の順序が逆に貼り込まれたものと考えらるべきであろう。

3. チェスター・ビーティー・ライブラリ所蔵絵巻〈CBLJ1178〉

次いで『チェスター・ビーティー・ライブラリ絵巻絵本解題目録』に作品24として載る1巻本の『文正草子』〈CBLJ1178〉について、三戸信恵の書誌と解説を要約する。卷子一軸、表紙33.0×28.4cm、全長538cm。外題「ふんしやう」、表紙は紺地金欄に花菱襷文様、見返しは布目金箔。詞書

はなく、一部の挿絵が本来の順序と異なったまま繋ぎ合わされ、全10図ある。各図の構図と図様は〈CBLJ1186〉とそれぞれ近似し画風も似ているが、面貌や樹木や土坡や水流の表現は異なり、同一人物の作ではなく「同じ粉本をもとにして、ほぼ同じ時期に同一集団に属する絵師によって描かれたもの」とされる。

金砂子を蒔いたすやり霞の「一部が余白として残され、そこに淡く藍が刷かれていること」(図6)は〈CBLJ1186〉にも明星本にもなく、

三戸はこの絵師の一種の「くせ」とする。他に明確な差異として、管弦の場面と京へ上る場面の見物衆の人数が挙げられる。前者は〈CBLJ1186〉の6人と明星本の9人に対し〈CBLJ1178〉は11人、後者は〈CBLJ1186〉と明星本が5人、〈CBLJ1178〉が8人である。三戸は襖絵や板戸の画題に相違が見られることも指摘し、両者を「画風、構図が一致とって良いほど近い関係にある場合でもこれだけの差が見られるということは、近世の工房においても、粉本をただ引き写すのではなく、絵師の裁量で細部の変更を行うことが可能であったと考えられ、その度合いを測ることができるという意味では、近世の工房制作の実態を知る手がかりとなる作品」と位置付ける。

明星本と比較すると〈CBLJ1178〉は〈CBLJ1186〉と同様に中・下巻の各図と構図と図様がほぼ一致し、見物人は多く描かれるが、3図を欠く。いずれも比較的地味な場面ではあるが、あえて描かなかったのか失われたのかは判らない。詞書がないことも、もともと一部分の絵だけしかなかったものを順不同でつなげたためか、詞書入りの絵巻から一部の絵だけを抜いたものであるかは、判断できない。ただ写真で見ると、保存は決して悪くないようで、例えば火事などの損傷により残存部分をつなげたものとは考え難い。

顔立ちは明星本より手馴れているものの、〈CBLJ1186〉に比べて平板でやや鼻が大きい。年齢差を表さないが、御所に参内する場面の文正のみは、明らかな老相に描かれる。もともと、結末部分における文正は老相ではない。〈CBLJ1178〉ではすやり霞の金砂子が、最も密にびっしりと蒔かれている。



図6 〈CBLJ1178〉本 (明星本中巻第3図に相当) 左上の霞の一部が薄青に塗られる

4. 東海大学中央図書館所蔵『ふんしやう』絵巻

東海大学図書館にも、明星大学本と図様の酷似する『ふんしやう』絵巻が存在することを「知の遺産 第8回 嫁ぐ娘に贈られためでたづくしの物語」(図7)¹³⁾によって知り、特別閲覧願を申請して明星大学本(写真図版)との比較を行った。同図書館によれば東海大学本の書誌は、以下の通りである。「ふんしやう」〈TW00919286〉上、中、下、3軸34cm(資料ID 001000492372~4)書写地不明、勇七[写]、江戸中期頃。内箱蓋の書名「ふんしやう」、内箱蓋裏側書き入れの書名「塩谷文正」、内箱蓋裏側貼紙の印記「木村」、内箱蓋裏側に「勇七手写の人 塩谷文正」、内箱蓋裏側に「人



図7 東海大学本
「知の遺産 第8回 嫁ぐ娘に贈られためでたづくしの物語」より



図8 東海大学本 上巻第2図部分
顔貌描写



図9 明星大学本 上巻第2図部分
顔貌描写

貳」の貼紙あり。外箱貼紙の書名「文正物語」、外箱に「文正物語 三巻」「卷35」「四三九」「昭和十四調」の貼紙あり。

以下は2018年10月1日の比較調査に拠る。表紙は緑地金欄若松宝尽文様に瓢丸紋、象牙軸、紫平打の巻緒が切れかかり、実際に使用されていた形跡がある。題箋は上巻「ふんしやう上」・中巻「ふんしやう中」・下巻「ふんしやう下」、見返しは金布目地、裏には金の切箔を散らす。紙継ぎの糊がわずかに剥がれかかっているが、保存状態は良好である。「東海大学図書館 /56.9.11/578074」の印あり。縦は明星本の33.1cmよりわずかに大きい。表紙の布は異なるが、題箋の表記、軸端、巻緒、紙質、紙背に散らした切箔などは似ている。詞書は鳥の子紙に金泥で草花模様の下絵が描かれる。画風も近く、冒頭に大き目の草木が密に表される点も、明星本と共通する。詞書の文字は明星本と似るが、「い満」と「いま」のように変体仮名に差異があり、明星本に比して「の」の字が丸いなど、やや違いが感じられる。

挿絵は上巻6図・中巻7図・下巻6図の計19図で、いずれも明星本と同数である。各図の構図と図様、全体の色遣い、上下の霞の形状や縁取りや蒔かれた金砂子の濃さ等は明星本の各図と共通するが、細部には相違が見出される。三戸がチェスター・ビーティー本において挙げたことと同様に人物の着衣の色と文様には違いがあり、絵師の裁量の内と思われるが、中将が恋煩いと商人の変装時以外は青の三重襷文様の直衣であることは他本と共通し、最後の2場面を除く文正や妻、娘たちの服装が一貫することも共通する。また、襖や屏風、板戸の絵は、水墨か着色か文様かはほぼ一致するものの、絵の主題は必ずしも同じではない。

文正の顔貌描写では、東海本(図8)の方が明星本(図9)よりも目・鼻・口が小さめで、代緒の隈はやや強く立体感が出る。面相の線はより細く丁寧なので、上品な印象である。着衣は上がくすんだ水色、下があずき色の配色は明星本と近似するが、上着は地紋は入らず金の模様、下には細かく赤茶と金で模様が入り、模様は明星本と異なっている。

明星本の個々の挿絵と比較した時の東洋大学本に見られた差異を、以下に挙げる。

- 上巻第一図 文太は丸に結び井桁紋(明星本は丸に4つの点)、池に鴛鴦無し、門を入る人物の向き異なる(明星本は後ろ向きで指さす)
- 上巻第二図 手前の松なし、海の上方に遠山、塩焼き男胡坐(明星本足出す)。
- 上巻第三図 左下は襖(明星本は建物の屋根)、塩俵担ぐ男の足に脚絆。
- 上巻第四図 鹿島神の使いは浅葱の袴、髭有り明星本に比べやや老相。
- 上巻第五図 産室の白装束の模様やや青味がかかる(明星本は薄墨か或いは銀)。右の赤子の着物白(明星本は赤)。
- 上巻第六図 襖の墨絵は若松と土坡(明星本は松竹梅)。重箱の上段、脇息に蒔絵なし。侍女の横顔に鼻を描く(明星本鼻見えず)。
- 中巻第一図 重箱に蒔絵なし。右上の男槍(?)持つ(明星本なく足上げる)。
- 中巻第二図 左の柳の下の柴なし。床の間の箱(?)なし。富士の絵は床貼り付けでない位置に描かれる(明星本は床貼り付け)。中将の位置は明星本より正しい。
- 中巻第三図¹⁴⁾ 襖の墨絵は鹿紅葉と若松と土坡(明星本は山水)。遣り水に青の濃淡の絵具(明星本は青一色)。遣り水の後ろの土坡なし。
- 中巻第四図 右の庭に木。板戸と屏風は着彩の菖蒲と竹、萩(明星本は墨絵)。
- 中巻第五図 上方に金泥を蒔かない。右の洞に笹、滝でなく青と白の水流。
- 中巻第六図 玄関は石畳でなく板目。左中の従者、膝に手(明星本拳手)。
- 中巻第七図 左の男やや老相、縁の荷物に紐を描く、明星本より一箱少ない。魚をさばく男の左の手付き異なる。庭の鶏親子なし。
- 下巻第一図 左の襖若松と土坡の絵。文正の脇息、写し崩れ。廊下の杉戸芭蕉図、開いて廊下見える。遣り水は青の濃淡に墨線。水の上方に金泥の暈しなし。
- 下巻第二図 遣り水は青の濃淡に墨線で水流を描く。
- 下巻第三図 文正の位置、やや上。庭の松の下の白丁、上は老人、下は中年に。
- 下巻第四図 左上の山と右の岬なく水面広い。水面に三角波を描く。輿の背後に従者さらに一人、後ろの白丁の槍(?)なし。
- 下巻第五図 文正の髪は灰色、目尻と口元に代赭で皺を入れた老相。軒に木鼻きはなを描く。庭の木に紅葉の楓。
- 下巻第六図 (文正は老相ではない)背後の襖は竹と若松と土坡、縁下かめはらに亀腹(漆喰の土台)を描く。

5. 明星本・〈CBLJ1186〉・〈CBLJ1178〉・東海本の比較

以上の4作の挿絵の異同を、一覧表「各文正草子絵巻の場面比較」によって考察したい。まず、挿絵数と挿絵場面の選択箇所については、数多く作られた「文正草子」の諸本では多様であり、16図と挿絵数の近い渋川版御伽草子(表の右端)と比較しても何場面かを欠く一方、渋川版にはこれら4作にない文正が娘達に嫁入りを迫る場面がある。明星本も東海本も上巻6図・中巻7図・下巻6図と等しく、上巻を欠く〈CBLJ1186〉の中巻と下巻の挿絵数と場面は一致し、順不同に貼り込まれて挿絵の欠落がある〈CBLJ1178〉にも、上記の三本にない場面は含まれない。

明星大学本『文正草子』絵巻と挿絵図様の酷似する『文正草子』絵巻について

各文正草子絵巻の場面比較 (左右は画面に向かっての左右) 明星本網掛の部分は順序が逆の可能性

番号	明星本	各場面の内容	明星本各場面の構成	CBLJ1178	CBLJ1186	東海本	淡川版御伽草子
	3軸 詞書あり			1軸 詞書なし	2軸 詞書の下絵近似 詞書一部上下逆貼り 文字最後ゆったり	3軸 詞書の下絵近似 使用文字に相違 文字の最後詰まる	横判1冊 (版本)
	縦各33.1cm 横上巻13m34.9cm 中巻13m65.8cm 下巻13m29.6cm			表紙33.0×28.4cm・全長538cm	縦32.6cm 中巻1397.6cm・下巻1412.4cm	縦34cm	17×24cm
表紙	練地草花模様 綾子装	—	—	紺地金襴に花菱襷文様	紺地金襴に唐草星模様	緑地金襴若松と宝尽し 紋に瓢の丸紋	紺紙
見返	金地	—	—	布目金箔地	布目金箔地	布目金箔地	—
1	上巻第一回 (横長大画面)	文太が鹿島の大宮司から暇を出される	大宮司の館、左奥に女4人、畳に男4人、板敷に男6人・3人、右の庭先に文太	—	—	①右手の門内の男の向き違、池に鴛鴦無し	大宮司の館、右に大宮司と男1人、左の庭先に文正
2	上巻第二回	塩屋で働き長者となり、名を文正と改める	右に浜辺、塩汲み2人、塩焼き1人、薪取2人、荷運び馬と2人、左の屋敷に文太夫妻	—	—	②手前の松なし、海の方に遠山無し、塩焼き男胡坐	左に海、潮汲み男1人塩焼き男3人、薪を担ぐ文正
3	上巻第三回	大宮司に子のないことを咎められ、文正は妻に離縁を切り出す	左の館に文正夫妻、手前板敷に女3人右の蔵に荷運び馬2頭と4人	—	—	③左手前は屋根でなく襦	左の館に文正夫妻、侍女2人 文正の紋梅鉢
4	上巻第四回	夫妻で鹿島神宮に詣で、神使から蓮華二茎を賜る吉夢を見る	左に神宮の神使と眠る夫妻、廊下に女ら3人、右の庭に馬と奥と4人眠る	—	—	④神使やや老相	左に鹿島神宮、中央拝殿に文正夫妻右に男2人女2人
5	上巻第五回	妻は2人の娘を産み、文正は怒るが、息子より娘がいと説得される	左に白い産室と赤子、侍女4人右に赤子を抱く文正夫妻、下女2人(異時間図か)	—	—	⑤	左に文正、対して赤子を抱く侍女、中奥は妻? 手前に侍女2
6	上巻第六回	文正の娘たちは美しく育つが、誰の求婚も受けない	左に娘二人と妻、中奥に文正、侍女4人、下女1人、右に庭	—	—	⑥横顔の侍女2人に鼻を描く、脇息、重箱上段に蔀絵なし	—
7	中巻第一回	常陸の国司が大宮司を通じて文正に娘を求める	国司の館、左奥に国司? 男7人童子2人中央縁先に文正、門外に馬2頭と4人	—	①中の一人折烏帽子柳葉が和様	⑦右端男長刀を持ち姿勢違、柳葉和様	左に国司の館、左奥に国司、中に大宮司と童子、対面する文正
—	—	文正が娘に国司との結婚を迫り、断られる	—	—	—	—	文正の館、左に娘、中央に文正、右に侍女2人
8	中巻第二回	娘たちに断られた国司が都に戻って中將にその経緯を話す	左奥に夜着を着る中將 間に男7人、右に庭	⑦遣り水なし	③中の一人折烏帽子遣り水なし	? 順不確実 池の向こうに土坡なし、水流の描き方違	右奥に中將、手前左右に男4人童子1人
9	中巻第三回	まだ見ぬ娘たちを恋い煩う中將と、見舞い事情を聴く兵衛佐たち	右奥に中將、左側に男7人、縁先に男1人、左に庭	⑧床の間が富士の絵 重箱と皿と箸 灰青の衾	②重箱と皿と台 床の間富士の絵 床の間に箱無し	? 順不確実 中將位置違 富士山図位置違 床に巻物なし	—
10	中巻第四回	中將は娘たちに違いを決心し、内心で両親に別れを告げる	中央右奥に両親中央に中將、右に女二人、手前の板敷に3人	⑧屏風は彩色 重箱あり	④中の一人折烏帽子杉戸絵は菖蒲 重箱皿箸台あり	⑩庭先に木なし	—
11	中巻第五回	商人姿で旅する中將一行が見通しの翁から予言を受ける	山中、左に見通しの翁 右に商人姿の中將と4人	—	⑤上は霞無し岩に笹	⑪楓紅葉、滝ではなく流れ、上方に砂子少かない	左に州浜、見通しの翁、屋で指す商人姿の中將と男3人
12	中巻第六回	中將一行は身分を商人と偽り文正の館を訪ねる	右に中將と4人と、門内の女、館の入口に男4人、左奥で板戸から様子を見る文正	⑨破風違 廊下石畳でなく板の間	⑥破風明星本に同じ 門描く 廊下石畳でなく板の間	⑫縁先は石畳でなく板敷	左奥に文正と娘2人、縁先で対する侍女2人と中將、男3人
13	中巻第七回	文正夫妻は商人姿の中將一行を泊め、酒宴に招く	中央に文正夫妻、左に中將と4人給仕の童子、壁の右の台所に男3人、庭に鶴	—	⑦鉢重箱位置違 鶴無し武藏野図月 荷物一つ少ない	⑬鶴無し、魚を擲く左手違 鶴の荷物紐を掛ける一つ少ない	右奥に文正、中に中將と男2人、手前に男3人
14	下巻第一回 (横長大画面)	管弦の会で中將と姉嬢は吹き上がった御簾の間から互いを見交わす	左に妻と娘たち5人、中に中將と4人と童と手前に文正、右の庭に見物衆9人	①見物衆11人、戸開く琴ややはみ出ない	⑧中の一人折烏帽子見物衆6人、土坡苦手、戸開く	⑭戸開く 琴はみ出ない 脇息写し崩れ	左奥に中將と男3人、中に文正、御簾の手前に娘2人と侍女
15	下巻第二回	夜、中將は姉嬢の部屋に忍び入り、契りを交わし夫婦になる	左上の部屋に姉嬢と中將 左下に妹嬢と侍女三人 右は庭	②左上青灰の霞と月	⑨戸の釘無し	⑮庭に紅葉あり	右の部屋に娘と中將、左は月と庭
16	下巻第三回	大宮司が訪れ、中將に気付き平伏すると、文正は驚愕して走り回る	左の盤に中將と2人、板敷に3人、庭に平伏する大宮司 男3人、上右の板敷に走り回る文正	③庭の男4人	⑩縁の一人折烏帽子庭の男4人 文正中年相	⑯松の後ろの男老相	右奥に中將、中に男5人と童子、左下に男2人(文正?)
17	下巻第四回	中將は姉嬢を妻とし都に帰る	左の樹下に見物5人、中央奥に水面、右下に中將の牛車、童2人女3人馬2頭と男5人	④見物8人むこうの州浜なしに青灰の霞 左ずっと海	⑪馬2頭男6人 対岸なし霞 左は州浜	⑰御背後男もう一人 左は土坡なく水面 右に土坡なし 水面に波	右下に奥と男5人女3人馬に乗る文正?
18	下巻第五回	噂を聞いた天皇が妹嬢を召し文正夫妻も上京する	左に御簾の垂れた御所板敷に東帯の文正と3名、庭に4名	⑤文正老相	⑫文正老相、軒先象鼻、縁の男顔見えない 枝先に白い花(橘?)	⑱文正老相髪灰色目元口元に皺 軒先象鼻	—
19	下巻第六回	妹嬢は后となり、産んだ皇子は帝となり、文正夫妻は百歳まで寿命を保った	左に姉嬢? と中將、中に文正と妹嬢? 男子2人、右に女3人、右廊下に従者2人	⑩重箱の蓋文正横顔鼻	⑬縁の男折烏帽子	⑲床下に亀腹	左奥に文正? 夫妻、侍女4人
備考				柱の色淡目、狩衣に紐描く	柱の色淡目	: 内箱蓋裏側に「男七手写の人 塩谷文正」とあり	
			(各人の着衣の色と文様、襦袢の主題はそれぞれ相違)				

4作の各挿絵の構図は一致するが、明星本中巻第二図と第三図と、〈CBLJ1186〉第二図と第三図の順序が逆になっている。両者の図柄はいずれも中將を囲む男達でよく似ているが、詞書によれば、第二図は国司がする文正の娘の話の中將が聞く場面、第三図は恋煩いの中將を十五夜の日に殿上人たちが見舞う場面となる。明星本第二図の夜着を着て横たわる中將や直衣の殿上人たちと右に広がる夜の庭の光景は、〈CBLJ1186〉のように十五夜の見舞いの第三図とする方がふさわしい。明星本第三図の直衣姿の中將と束帯や衣冠姿の男達の服装は病氣見舞いにしては堅苦しく、〈CBLJ1186〉第二図の如く殿中での四方山話の場面とする方が妥当である。明星本の挿絵が貼り込み位置を間違えたと考えられる。

この挿絵箇所を除外しては、4作とも構図のみならず色味も画風も、細部まで近似している。しかし、顔貌の描き方や水流、上下の霞などの表現に個々の違いが見られ、同一人物による制作とは思えない。4作の近似は、模写したことに因ると考えられるが、各本の異なる箇所において小さな相違が見出されるので、何れかが原本ということではなく、4作とも共通する原本を模写したものと推測できる。

ただし、原本が必ずしも正確なもので、詞書の内容に忠実であったとは限らない。例えば、下巻第一図ではいずれの絵でも琵琶の首が異常に長くまるで月琴のように見えるのは、原本の琵琶の形状に因ると思われる。下巻第五図の参内する文正は、4図中3図が老相に描かれているので原図も老相であったと推測されるが、それより後の下巻第六図の文正がいずれも老相でないのは、原本の間違いをそのまま写したためであろう。また中巻第一図の上座の男はいずれも青の三重襷の直衣に描かれる。詞書からすれば文正に娘を求める国司のはずだが、以後に登場する中將がいずれの本でも同じ青の三重襷の直衣で描かれ続けることと混乱しやすい。原本の時点で各人物の着衣を設定した折の誤りであろう。

模写の方法には、原本の上に薄い美濃紙を乗せて透かして輪郭を写す「透写し」と、原本を傍らにして描く「臨模」があるが、例えば下巻第三図で驚いて廊下を走り回る文正の位置が少しずつ異なっていることから、「透写し」ではなく「臨模」と思われる。また、4作で人物の形態はほぼ一致しながらも、上巻第二図の塩焼き男のように手足の形状が違うところがあるので、模写は人物の体と手足の大体まで、着衣の色や文様が異なることから、墨線による衣襷のみの模写で模様は写さず、襖や板戸の主題については水墨か着彩か程度の覚書であったと推測される。

着衣の文様や襖など建具の図柄については、それぞれが異なった図柄で書き込み、樹木や明星本の鴛鴦や鶏のような庭の細部、見物人の人数についても、多少の変化を任意で付け加えたものと思われる。

4作を比較したとき、各本の得意不得意もほの見えてくる。明星本は人物の表情に関しては、最もごちない。顔色も白みが強く代楮の隈が極めて淡いので、平板で人形めいて見える。ただし襖などの水墨画や山中の岩や樹木など、漢画めいた箇所は巧みで、鴛鴦や鶏の親子などはこの絵師の創意で付加されたものと思われる。

対して東海本は人物の顔貌描写は手馴れていて、丁寧にゆっくりとした筆遣いで描かれている。一方で調度については、脇息の足部分の形を取り違えて描いたり、蒔絵を描かなかったりと、不得手に思われる。襖の墨絵は漢画風の山水が苦手なのかこの画題が好きなのか、若松と土坡という〈CBLJ1186〉に一度しか見られない主題を何か所にも描いている。建築要素では他に見られない木

鼻や亀腹を描き加えているところも注目される。

〈CBLJ1186〉は、人物も背景も手馴れているように思われる。脇役の人物の顔を一樣には描かず、魚を料理する者のように表情を付けたり、中年相や老相を思わせる皺や隈を描いたりして、変化を加えている。

〈CBLJ1178〉は、詞書がなく絵にも欠落場面があり、順不同に貼られた未完成の状態であるが、一図ずつの絵は巧みで、管弦の会や中将と姉娘の上京場面では見物人の人数を増やし、職種や老若男女を描き分ける意欲と余力を見て取ることができる。また霞に蒔かれた金砂子は極めて濃く、金銭的な理由での制作中断とは考えにくい。

6. 酷似する『文正草子』絵巻が複数存在することの考察

このように、それぞれ描き手の異なる4件の『文正草子』絵巻が、同一原本の挿絵のかなり精密な模写によって作られたことは、どのように解釈すればよいのか。

仮にそれが奈良絵本の中でも安物の量産品であれば、売れ筋の『文正草子』を工房内で一度に複数描かせておいて、表具や製本を施して売ることが考えられよう。またかなり上質の作品でも、注文に応じて同一の絵師が前作と近似する挿絵を描くことはある。例えば同一の絵師による、それぞれのほとんど挿絵が近似する江戸前期の絵本として、石山寺本とバイエルン州立図書館本『源氏小鏡』が挙げられよう¹⁵⁾。

しかしこれら4件の『文正草子』絵巻の挿絵は人物の顔貌も着衣の文様も、極めて手間のかかった作りで、絵具も金も上質なものが使われている。また、同一の絵師によるものでないことは、先に個々の表情や技法の違いとして挙げた如くである。また表紙の金襴や緞子の布はそれぞれ違い、外題も明星本と東海本が「ふんしやう 上」「ふんしやう 中」「ふんしやう 下」、〈CBLJ1178〉が「ふんしやう」、〈CBLJ1186〉中巻が「ふむしやう物かたり」下巻は外題なしと、まちまちである。安価な奈良絵本の工房で、一挙に量産する目的で複数制作されたものとは考え難い。

ならば仮に、これらの制作の場が奈良絵本の工房でなく、これらの模写の当初の目的が販売でないとするれば、どうであろうか。模写を行う目的としては他に、贋作のためと、個人の楽しみのため、絵画技術習得のため、が考えられる。このうち贋作については、原本自体がさして著名でないことから、考慮の必要はあるまい。個人の楽しみとしては、スポンサーコレクションの六巻本「白描源氏物語」が、「本のごとくうつし……」とあり、素人の女性による模写として知られている¹⁶⁾。もっとも『文正草子』絵巻についてみれば、画風も技量もよく似た4人もの素人が、揃いも揃ってほぼ同時代に、自身の楽しみのために、これほど詳細な模写や細密な衣装の描き込みを行ったものとも思えない。

それでは、技術習得目的の模写としてならばどうだろうか。狩野派が手本の模写を絵画学習の手段として位置付けていたことは、よく知られている¹⁷⁾。また、大和絵の土佐派においても、多数の模写本が伝えられてきた¹⁸⁾。近接する時代に複数の人間が同一の原本の模写を行っていたとあれば、画塾における学習の目的であった可能性は、充分考えられよう。ただし通常の模写において、彩色は文字で書くか心覚え程度に色を指すかという程度であり、ここまで濃彩で金砂子や金泥

を使って描き込むことはない。また、着衣の文様や見物人の数などを任意に変えることも、修学目的の模写で許されることではあるまい。

ならばなぜ、描き手が違うにもかかわらずこれほど酷似する絵巻が、複数作られたのか。考えられることに、絵画学習の節目における作品制作がある。例えば狩野派では、模写の最後の課題が狩野探幽の賢聖障子絵であった(注17参照)という。そのような意図ならば『文正草子』の挿絵は、都と鄙、貴人と塩焼きと商人と神使と庶民、人物と建築と庭や行路の山水、障子の和絵や水墨画と、題材が変化に富み、模写学習の対象として好適である。描き手が「やまと絵と狩野派の画風の両方を学んだ専門絵師」とされる(注10参照)この工房において、絵画学習の最終課題として描かれていた作品と想像することも可能なのではないか。

これら何れの絵にも署名がなく、東海大学本の内箱の蓋裏に「勇七手写の人 塩谷文正¹⁹⁾」と奇妙な書き付け方がなされることも、そのような学習過程の模写であれば師による添書きとも解釈できる。『文正草子』は正月の女子の読み初めに使われるだけに需要が多く、時間をかけて丁寧に仕上げた華麗な挿絵は、詞書と併せて表具すれば、商品として高く売れることも可能であろう。内容の近似にもかかわらず、それぞれの表具布が異なり、外題の表記が異なっていることも、独立して師のもとを離れ、表具師の制約がなくなったためとすれば理解できよう。詞書がなく挿絵が順不同で物語としては欠落場面がある(CBLJ1178)は、描き手が販売する意図を持たずに自分の手元に残したためということになるうか。

学び取った絵柄は、他の形態の作品へと応用することも可能である。例えば、茨城県立歴史館等に伝来する二曲屏風が、物語の山場である管弦の会で中将と姉娘が視線を交わす場面の挿絵と同一の図柄であることも、このような『文正草子』絵巻の模写学習からの発展形と見ることができるかもしれない。

注

- 1) 柳亭種彦編「一草紙の読初」『用捨箱』上之巻冒頭
- 2) 岡田啓助『文正草子の研究』pp.51-53、桜楓社 1983年
- 3) 明星大学平成22年度特別研究費(共同研究助成費)研究成果報告書『明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究とWEB公開、教育実践への応用』、2011年。なお明星本『ふんしやう』の詞書も含む全写真図版と釈文・報告書の内容は、明星大学の「絵本・絵巻の世界」<http://ehon-emaki.meisei-u.ac.jp/>において、WEB公開されている。本稿の図版もこのサイトに拠る。
- 4) 柴田雅生「明星大学本『ふんしやう』『新曲』について」同報告書 pp.32-34、2011年
- 5) 山本陽子「明星大学本『ふんしやう』絵巻の挿絵について」同報告書 pp.24-26、2011年
- 6) 赤澤真理「江戸前期における寝殿造りへの憧憬と理解—住吉派物語絵にみる住宅観」『講座源氏物語研究 第10巻 源氏物語と美術の世界』pp.234-265、2008年
- 7) 5章で詳述するように、明星本の中巻第二図と第三図は、詞書の内容から順序が逆に貼り込まれたものと考えられる。
- 8) 茨城県立歴史館 WEB サイト 茨城歴史辞典掲載所蔵資料一覧「『文正草子』屏風 http://www.rekishikan.museum.ibk.ed.jp/06_jiten/shozou/bunsiyouzousibyoubu.htm 2018/10/17 また後出の石川教授によれば、茶道資料館にも同種の文正屏風があるとされるが、図版も実物も未見である。
- 9) 石川透「絵入り本の世界」於「絵入り本国際集会 2011.8講演会」
- 10) 三戸信恵「23 文正草子」「24 文正草子」『チェスター・ピーター・ライブラリ絵巻絵本解題目録』図録篇 pp.74-76・解題篇 pp.26-27 勉誠出版 2002年 本稿の図2・図6は本書に拠る。

- 11) 比較に際しては、石川教授よりお借りしたチェスター・ピーティー本〈CBLJ1186〉〈CBLJ1178〉の写真データを使用した。
- 12) 本稿では詞書文章間の比較検討は行わない。
- 13) 毎日新聞「東海大学を知る web マガジン」東海イズム「知の遺産 第8回 嫁ぐ娘に贈られたためたづくしの物語」(2014年2月2日掲出)<http://mainichi.jp/sp/tokaism/heritage/08.html> 2018/10/21 本稿図7はこのサイトに拠る。
また、東海大学付属図書館特別図書展 第56回「語り継がれる書物たち」No4として掲載され、第二図の部分写真がWEB公開されている。<http://www.tsc.u-tokai.ac.jp/ctosho/lib/tenji/56th.files/56th.pdf> 2018/10/21 本稿図8はこのサイトに拠る。
- 14) 東海本の中巻第二図と第三図の順は、閲覧時のメモの不備により確認できない。
- 15) 山本陽子「奈良絵本『新曲』挿絵の制作過程を考える—明星大学本と諸本および『源氏小鏡』を比較して—」『明星大学研究紀要』[人文学部・日本文化学科]第25号 pp.35-48 2017年
- 16) ニューヨークパブリックライブラリー所蔵 (片桐弥生「スペンサーコレクション「白描源氏物語絵巻の内容と位置づけ」『源氏絵集成』研究編藝華書院 2011年、参照)
- 17) 橋本雅邦「木挽町画所」『国華』3号 pp.15～20 1889年
- 18) 京都市立芸術大学芸術資料館 編『土佐派絵画資料目録』1～7 1990～1997年
- 19) 「塩谷文正」「塩屋文正」は『文正草子』の別名。

付記

本稿の調査過程で石川透教授より、Delphine Mulard 氏が一連の近似する『文正草子』絵巻についての考察を含む博士論文 Production et réception des manuscrits enluminés japonais des XVIIe et XVIIIe siècles : le cas du « Récit de Bunshô » (Bunshô sôshi) をパリ大学に提出していることを知った。未見で、内容はまだ本稿に反映されていないので、暫定的に研究ノートとして提出する次第である。

本稿の明星大学本『文正草子』絵巻との比較において、チェスター・ピーティー本〈CBLJ1186〉〈CBLJ1178〉については、慶應義塾大学の石川透教授より写真データをお借りし、東海大学本については、東海大学図書館より閲覧の機会を頂いた。ここに記してお礼を申し上げたい。